

# 保育への視座(3)

——若い保育者の方々へ——

河邊

杲



ある幼稚園の保育研究に参加して学んだことであるが、三年保育四歳児クラスのK君はみんなと同じようにスムーズに行動ができないため、いつも日常の行動が他の子どもたちに遅れてしまう。降園児の支度も遅れがちで大体他の子どもたちが終わって席についてから十分から十五分遅れて座席に着くことは毎日のようであった。その日もK君を除いて全員揃った時には廊下のロッカーから持ちものを持って保育室の中央近くに座りこみ、

あそび着を脱いで通園服に着替えていた。担任の先生は座席（先生の近くに椅子を持って来て円型の席）に着いているこどもたちに話しかけながら「手あそび」をはじめられた。十五分程遊んだ頃にK君が支度を終えて椅子をもって席に着くなり大声で「先生、ちがうちがう」と言ったので、活動を中断した先生は「なにがちがうの」と聞きかえされた。K君は「ほら、きのういったでしょう」と。先生が「あ、絵本をよんであげること

ね」と応えると「うん」とK君は大きくうなずいた。その時先生は「みんなが揃うまで。K君を待っていたのよ。ね、みんなそうよね。」と他の子どもたちに同意を求めるようなことばをつけ加えながら言われた。「うんそう。K君が来るまで待っていたのよ。」と揃わないことばがはねかえって来た。K君はきょんとした表情で友だちの方を見廻しながら聞いて立っていた。子どもたちはそのあと絵本をよんでもらい帰りの際の話し合いを終えて降園していった。

保育が終わり、この時心に残った担任のことばがけについて話し合っているいろいろなことについて考えさせられた。

先生はK君に約束と違った行動をしていたことについて、ごく日常的に軽い気持ちで説明するために「みんな揃うまで。K君の来るのを待っていたのよ。」と話し、さらにクラスのみんながK君を待っていたのだという他人への意識を明確にす

るために、これも極めて日常的に「ね、みんなもそうよね」とつけたして言われたに過ぎないと言ってしまうば、それまでのことで何の不思議も疑問もわからないと思う。先生にとって当然の説明をされたのに過ぎないかも知れないが、約束を想い出し違いを発見したことに対しては応答しなくてもよかったのだろうかという疑問が生じたのである。「ちがうちがう」といったK君の指摘に対して説明をしたことについて先生の心には何も残らなかったのだろうかと思っただ。こういうことは、常にどこかでやってしまっていることのようにある。自分ではなかなか気がつかないのだが、使ったことばを文字に置きかえて記録してみるとそのことにはっと気がつくことがある。正しい説明とはいいいながら、保育者は自己弁護のみをしたことになってしまっている。もう少し幼児のことばを傾聴するようになれば「Kちゃんよくおぼえていてくれたね」とK君の発見に対してひとこ

と肯定的に受けとめてあげられたのではなからうか。K君は別に批判したのでも、間違いを指摘したのではない。約束との違いを発見したに過ぎないのである。

いま、ひとつ気づいたのは、「みんな揃うまで……待っていた」という先生のことばと、「うん、そう。K君が来るまで待っていたのよ。」といった子どもたちの待っていたのことばには違うニュアンスが感じられた。先生のことばには「みんなが揃うまで……」が最初にあるようにとにかく「揃うこと」、「揃えること」の意識が常に念頭に強いのではなからうかと思った。三十人四十人の子どもをあずかっている集団生活の指導では当然のことのようににも思われる。全体が揃って同じように経験してほしいねがある。個性や個人差のことは一方で意識していてもである。これに対して子どもたちは「K君が来るまで……」という、「K君が来ないと淋しい。たのしく

ない」という心持ちが「待っていたの」の中にあるのではないだろうか。保育者にとっては少し厳しいことになるかも知れないが、先生の待っていたのはみんなが揃ってくれるのを待っていたのではないだろうか。このことがよくないと問題にしようとしているのではない。こうしたことばがかけに気づくかどうかである。

これは井上忠司氏が『世間体の構造』（NHK選書）の中で述べている日本人の特性、つまり「日本人は基本的に一人であることの独立した自己であること、感覚が欠如している」ということと無関係でないようにも思う。「日本人の自我は眼前の状況に深くまきこまれて」と。つまり常に「みんなと揃う」「みんなに揃える」「みんなでまとまる」「みんなをまとめる」が自己意識を支配し過ぎていくのかも知れないとも考えられる。（時代的な思想の背景も考えられるが）

もし、このような自己意識であることを自覚し

ないと、子どもたちの個人的な純粋な心持ちを理解することはむづかしいことになる。

常に、「集団が揃う」「集団がまとまる」ことを前提に保育するとしたら、子どもひとりひとりが見えてこないしもちろんひとりひとりの心持ちにふれることはとてもむづかしいことと言わなければならぬ。

子どもたちは親や親しくなった友だちの顔が見えないと悲しくなったり、不安になったりする。ある子どもは入院していて友だちはほくのことを忘れてしまわないだろうかと心配しているのを聞いたこともある。待ちかね、待ちわびる心持ちが働くようである。したがって「待っていた」にはナイーブな心が伴っていると考えてよいであろう。

「揃えさせずればよい」とだけ考えられている保育者の方はいないと思うが、前途の日本人的な特性といったものが無意識に働くとすると、ひょ

っとして、結果的には揃ってくれることへのねがいのみが強く意識され、その時は子どもが見えなくなり子どもたちの心持ちにかかわれなくて子どもたちの心を育てないで終わるかも知れない。これは恐ろしいことである。

これに関連して思うことがある。それは「みんなが揃うように」「みんながまとまるように」ということは集団を制御したり操作したりすることにもつながる。こうなると、ますます子どもの心持ちにはふれられなくなるのだろうか。これも幼稚園などでよくある日常的事であるが、子どもが怪我をして応急の処置をするために怪我した子どもを職員室や保健室に連れていかれるとそうしろからぞろぞろと他の子どもたちが付いて来る。その時多くの場合先生は「邪魔になるとこまるから）……お部屋で静かに待ってね」と言って、あとをついてこないように指導される。これは臨機の指導として当然のことだと思うが

「心配して来てくれたの？ 大丈夫だから、安心してね」をお部屋で待つことの指示の前にひとこと話されたらどうだろうか。

このように考えて来ると出生以来人間がもっている心が一層豊かに育っていくかどうかは、極めて日常的な集団生活のその場その場において、子どもたちのナイーブな心が秘められているといってもよい原初的な言動の、その心のところにふれてあげられるかどうかにかかっている。そうなれば前記日本人の特性の基本もきつと変容を見るのではなからうか。今般の教育要領の改訂で真剣に見直しをされている中で、このような視点で見直しをしてみることがどうであろうか。

「ひとりひとり」が強調されると必ずと言ってよい程集団の指導はどうするのかという問題が出て来る。個人で活動することのたのしさとは違っていた、集団でする活動のたのしさを味わわせたり、三十人四十人のクラスや学年や園全体などではい

ろいろな形の集団でする活動もいろいろ考えられる。ひとつの集団でする形に慣れる指導も必要ではあるが、なんといいても形になる前の人間が生まれつきもっている不思議な社会的感覚とでも言える「調和させようとする働き」や「共鳴したり共振する働き」を信頼し、この働きが十分機能するように育てていくことこそ大事なのではないだろうか。つまりひとりひとりの響きあう感受性といったものへの働きかけを抜きにして集団生活の指導はないと思う。もう一度、ことばではひとりひとりを大切に子どもを理解することから保育がはじまると言っている保育者自身の自己意識（ほんとうにひとりひとりが感じとれ、そしてしっかりと見える自分になっているのか）についてたしかめてみたいものである。

(元・洗足学園短期大学)